

資料

鳥取県日野町黒坂地区における高齢者向け交流サロン 「おしゃべりカフェ」の取り組みと評価

空閑 睦子・鷺見 強志

Evaluations on Activities of Regional Community-Based Salon "Oshaberi Cafe" for Elderly People
in Kurosaka District, HinoTown, Tottori Prefecture

KUGA Mutsuko and SUMI Tsuyoshi

要 旨

鳥取県日野郡日野町黒坂地区における高齢者が集う交流サロン「おしゃべりカフェ」を対象に行ったヒアリング調査と観察をもとに、その設立から現在までの経緯と成果、今後の課題を分析・整理し、人口が減っても地域の住民らが幸せに生きる仕組みづくりに必要な視点を抽出した。その結果、地区の高齢者が主体となる交流サロンの立ち上げと運営において、以下の視点が見出された。行政関係機関と地区のリーダーらが連携しながら地区の高齢者と対話を重ね、身近な高齢者の視点や意見を把握して地域に今何が必要なのかをすくい上げたこと、高齢者住民のネットワークを活かしてスタッフを構成したこと、行政は参加スタッフの意欲を高めるような無理のない出番を創出したこと、町内向け広報紙で積極的な広報を展開したことなどが要因となり、交流サロンは「自分たちの場」とであるという住民の自覚を高めたことが確認できた。

キーワード：高齢者，交流サロン，地域づくり

I 問題の所在と本報告の目的

集落の人口が増加することが、地域住民の幸せにつながるのかということには疑問の余地があろう。人口が減少しても、地域の住民が幸せに暮らすことができる仕組みづくりも考える必要があるのではないだろうか。人口が減少しても、地域に住む人の思いを大切にしたい、幸せに暮らせるための仕組み作りには、当事者である地域住民の意識や行動に焦点を当てた研究の積み重ねが必要であり、その有効な手法の一つとして交流サロンの事例検証が挙げられる。

本報告では、鳥取県日野郡日野町黒坂地区で運営されている、主に高齢者が集う交流サロンである「おしゃべりカフェ」の設立から現在までの経緯と成果、今後の課

題を明らかにする。人口が減っても地域の住民らが幸せに生きる仕組みづくりの方法の模索を目的に、主にヒアリング調査の結果を整理し検討した。

II 研究方法

1. 言葉の定義

交流サロンには、ふれあいいきいきサロンやほっとサロン、コミュニティカフェなど、さまざまな呼び名がある。いずれも地域の高齢者の居場所づくりが目的であり、日本全国各地で設置が進められている。各地域の社会福祉協議会は、高齢者の引きこもりなどを防ぐために、交流サロンづくりを促進している。

本報告における交流サロンとは、地域において住民が

自由に集える場所やその場を拠点とした活動とする。

2. ヒアリング調査と評価の方法

本研究では、黒坂地区にオープンした交流サロン「おしゃべりカフェ」に関して、鳥取県西部総合事務所日野振興センター日野振興局（以下、日野振興センター）とそこに所属する地域づくりサポーター、日野町役場の関係者、「おしゃべりカフェ」代表者とスタッフ、そこに集う住民らに対してヒアリングを実施した。また、カフェの実際の運営状況の観察も行った。

これを基に「おしゃべりカフェ」の事業展開を時系列に並べ、さらに事業プロセスをニーズの把握期、具体化への検討期、実践・運営期に分け、県、町、カフェ代表者の三者の役割について分析・評価した。

3. 倫理的配慮

本報告に当たっては、「おしゃべりカフェ」及び対象者に対して本研究の主旨・方法について書面及び口頭で伝え同意を得た。

III 日野町と黒坂地区の地理・歴史的背景

1. 日野町の概要

1) 日野町の地理的概要

日野町は鳥取県西南部に位置し、同県江府町、伯耆町、南部町、日南町及び岡山県に接している。日野川に沿うように JR 伯備線が町の中央を通る。国道 180 号と 181 号が走る町内は黒坂地区を含む 27 地区から成る。

2) 日野町の歴史

黒坂、下榎、岩田、榎市などに古墳が分布し、町の歴史は弥生時代までさかのぼるとされている。平安時代末期には、この地に流された長谷部信連により、京文化がもたらされ、延暦寺や祇園橋、長楽寺などの創建が進められた。戦国時代には尼子・毛利両氏の相争う戦場にもなった。

徳川時代初期には、関長門守一政（せき ながとのかみかずまさ）が黒坂に城下町を形成した。

藩政時代には、福田氏による委任統治（自分手政治）が行われ、宿場も形成されて、新田開発など農業も生産拡大が図られた。また、山砂鉄の採取とたたら製鉄は、明治時代に近代製鉄が台頭するまでこの地域の重要な産

業だった。

明治時代になると急速な近代化が進み、同 22 年の町村制施行により、根雨、真住、渡、安井、黒坂、菅福の 6 カ村に、大正 2 年には根雨町、日野村、黒坂村の 1 町 2 村となり、昭和 11 年には黒坂村が町制施行し、同 28 年、根雨町と日野村が合併して根雨町となった。同 34 年には根雨町と黒坂町が合併して現在の日野町が誕生した¹⁾。

町の人口が最も多かったのは昭和 20 年代終盤であった。当時の人口は約 8,000 人であったが、以来過疎化が進み、平成 25 年 3 月現在で 3,457 人、世帯数は 1,324 世帯である。うち 65 歳以上人口は 1,540 人、高齢化率は 44.5%であり、15 歳未満の人口は 277 人、割合は 8.9%で年少人口の割合は年々減少し、少子高齢化が進んでいる（図 1）²⁾。

3) 日野町における高齢者施策

日野町では高齢者施策として、交通対策、生活支援、見守り事業、介護予防と、大きく 4 つの柱を立てて取り組んでいる。

交通対策では、高齢者を含め町民の通学や通院の手段として、平成 18 年に町営バスの運行を開始している。また平成 23 年からはタクシー利用者助成として、65 歳以上の高齢者や障害者等にタクシー料金の一部を補助している。町内の移動はおおむね 1,000 円以内で可能である。

生活支援では、高齢者の買い物支援として地元スーパーマーケットの移動販売を補助している。また、専用車両の導入費用や運営費の一部を補助（県補助あり）している。

見守り事業では、平成 20 年から見守り支援事業として見守り支援員を配置し、75 歳以上の独居高齢者世帯を訪問する施策を各団体や事業所と協力しながら実施している。

介護予防では、平成 16 年から始めた集落に出向いて健康教室を行う「ぼかぼか教室」がある。

2. 黒坂地区の概要と歴史

黒坂という地名は、町の周囲にあった九つの坂を称して「九路坂」と表したことから始まったという言い伝えがある。関氏 5 万石の城下町として栄え、町の基礎が造られた。関ヶ原の戦後の慶長 15 年から、伊勢亀山藩主であった関一政が 8 年間この地で治政に当たった。その

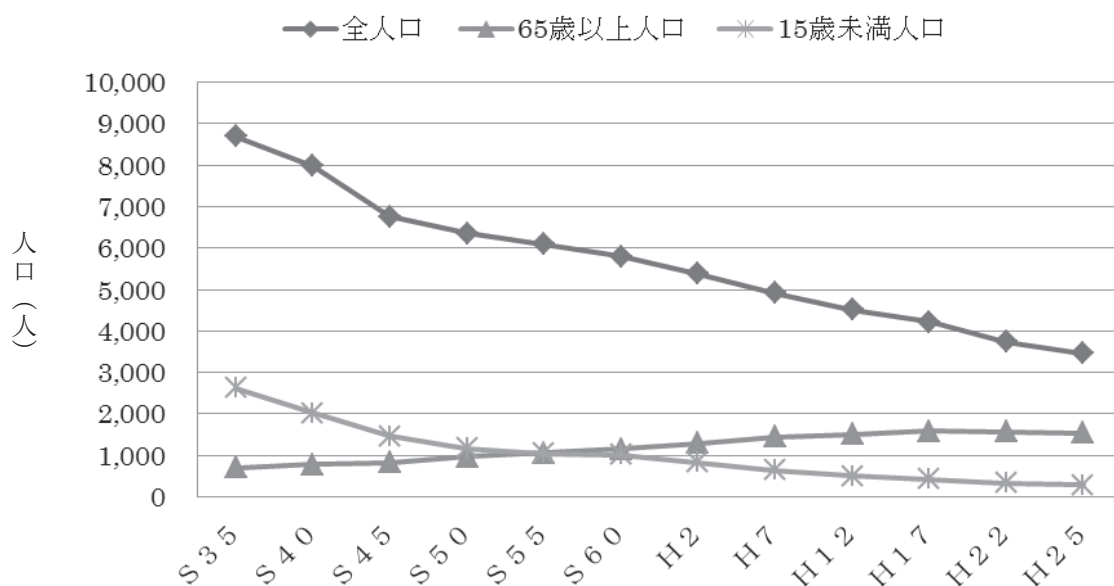


図1 日野町の人口推移

後同地区は、日野往来の宿場町として発展した。

本報告の対象となる黒坂地区とは、旧黒坂町のうち在部を除く町部を指し、7自治会で構成される。人口及び世帯数は、平成22年国勢調査によると、人口533人、世帯数220世帯である。高齢化率は43.9%である。

IV 交流サロン「おしゃべりカフェ」事業概要

1. 開設経緯

1) 「おしゃべりカフェ」オープンのきっかけ

同地区は町部のため、平成元年以前頃までは食料品店から酒屋、雑貨屋、衣料品店、クリーニング店、電器屋などさまざまな店で賑わい、喫茶店や食堂は地域住民の交流の場でもあった。しかし、平成元年頃を境に店は減り始め、平成12年に起きた地震も影響し、現在は酒屋、食料品店、衣料品店、薬局が各1軒ずつ残るのみとなっている。このため居場所を失った高齢者らは家に閉じこもりがちになった。

同地区には住民が集まるための公共施設として、日野町公民館と日野町社会福祉協議会の施設があるが、それらの利用には事前の予約が必要であり、その日ふと思いついて何人かで集まる、もしくは他愛のない世間話をするだけに向向くといった形では利用し難かった。

そのような状況の中、平成24年7月、日野振興センタ

ーの地域づくりサポーター³⁾の梅林敏彦氏が、地域の高齢者に交流サロンの開設への意見やとじこもりの現状をヒアリングした。その結果、女性の高齢者を中心に、「みんなが気楽に集まれるような場所を作ることができたらと前から話していたが、実行に移す者がいない」、「お互いの家を訪問し合えばいいのだが、相手の事情などを考えるとどうしても遠慮してしまう。それでだんだん行き来がなくなり、ひとり家に閉じこもってしまう」というような意見が見られた。

なお、梅林氏は日野町出身者であり、7年前に関東地方からUターンし、公民館館長などを経て地域づくりサポーターとして現在は活動している。

2) 各種組織や自治体との連携

このような声を受けて、まずは同地区内の各種活動団体である黒坂鏡山城下を知ろう会、黒坂地区自主防災委員会、黒坂地区コミュニティ推進協議会、各自治会などのリーダーらに対し交流サロンの開設の必要性を呼びかけるとともに、女性住民と日野振興センター職員及び地域づくりサポーターが中心となり、「おしゃべりカフェ」の立ち上げの計画を進めた。また日野町役場、日野町社会福祉協議会にも適宜意見を聴取しながら進めた。

平成24年7月、黒坂地区は「中山間地域づくりサポート体制構築事業（重点支援集落への特別支援）」⁴⁾の重点

支援集落に指定される。また、同年 10 月には、鳥取県中山間地域振興協議会⁵⁾の重点支援集落に指定された。

3) 場所選定

交流サロンの場所の候補については、黒坂 3 区内の空き家や無人駅となっている黒坂駅舎の活用などを検討したが、最終的には日野町役場の支援を受け、日野町公民館のロビーを借りることになった。

同館のロビーには元々カウンターが設置されていたが、交流サロンが開設されるまでは利用者もなく、物が置かれるなどの状態になっていた。

4) 設立に向けての会合

平成 24 年の 7 月以後、交流サロンの開設に向けて立ち上げメンバーらが動き始めた。おおむね月に一度の会合や個別での折衝などを経て、発案から約半年後、具体的に形が見えてきた。平成 25 年 1 月 17 日、日野町公民館会議室で、「黒坂地区“おしゃべりカフェ”設立に向けての会合」が執り行われた。

この会合では、これまでの経過が報告されるとともに、名称、サービス内容、運営責任者の選出、営業日と店番担当、設置場所、カフェのオープン日などが確認もしくは決定された。

運営責任者の長をマスターと呼び、補佐役をサブマスターと呼ぶことにした。マスターには西古尚史氏、サブマスターに女性 2 名を選出した。西古氏は、黒坂鏡山城下を知ろう会の事務局長でもある（写真 1）。



写真 1 代表の西古尚史氏とスタッフ

2. 「おしゃべりカフェ」の内容

1) 運営

オープン は平成 25 年 6 月 2 日であった。看板が公民館前に設置されたが、この看板は福祉施設「セルプひの」（日野郡日野町根雨）の手作りである（写真 2）。



写真 2 公民館前に設置された「おしゃべりカフェ」の看板

最終的に「おしゃべりカフェ」の概要は、下記の通りとなった。

設立の目的は、「黒坂地区には、いつでも誰でも、自由に立ち寄って世間話ができる場所がない。“年寄りが一人で立ち寄っても、気軽に誰かとおしゃべりができるそんな場所が欲しい”という多くの高齢者の声に対応した、高齢者の居場所づくり。」とする。

場所は日野町公民館のロビーの一角にあるカウンターを中心とした空間である（図 2）。開店日は毎週火、木、日曜日及び毎月第 3 金曜日で、営業時間は午前 10 時から午後 3 時までの 5 時間である。これは、火曜日と木曜日が日野病院黒坂診療所が同公民館で開所される日であり、第 3 金曜日は月に 1 度開校される「おしどり学園」（同公民館で行われている生涯学習の活動）の日であることに合わせて設定した。

スタッフは参加者を募った結果、前述のマスターとサブマスターを含む 15 名（男性 2 名、女性 13 名）が集まり、輪番制で行う体制とした。全員無償ボランティアで、年齢構成は 60～80 代である。交流・歓談の場に無料でコーヒーを提供している。また小さな募金箱を置き、住民からの寄付金をコーヒー豆の購入費などの運営資金としている。家賃や光熱費は日野町役場が負担しているため無料である。

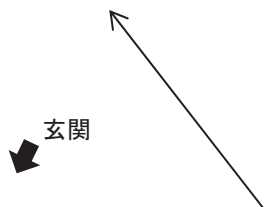
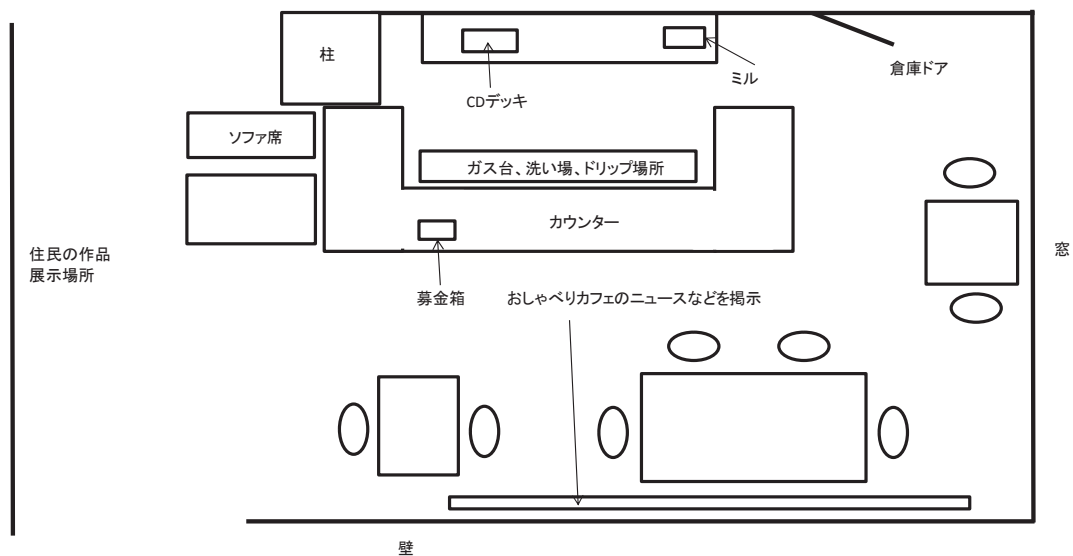
「おしゃべりカフェ」は、運営にはお金をかけないこと、無理のない範囲で楽しみながら自分にできることだ

けをすることなどを意識して活動している。

運営費用に関しては、「おしゃべりカフェ」開設後 1 年間は、中山間地域づくりサポート体制構築事業の支援地区に提供される 20 万円の補助金があり、それを活用した。主に視察費や講演会を開催した際の講師への謝礼に充てられた。重点支援地区への補助金は平成 25 年度と 26 年度の 2 回提供されたが、おしゃべりカフェは自立的

な運営をするために平成 26 年度は補助金の申請をしないこととし、訪問客の寄付による資金で運営することにした。長期的に安定した運営を実現するためには、早くから補助金に頼らなくていい体制をつくることが重要と考えたからであるという。

2) 活動内容



玄関

玄関正面のロビーにもソファがあり、そこでもコーヒーが飲める。

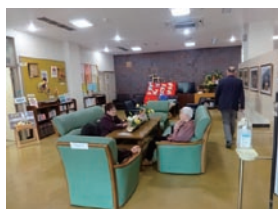


図 2 おしゃべりカフェ空間の様子

表1 「おしゃべりカフェ」オープンまでの取り組みとオープン後の主な活動内容

年	日	付	取り組み事項
平成 24 年	7 月	中旬	「気楽に立ち寄れる場所がほしい」という住民の声が挙がったことを受け、黒坂地区内各種活動団体、各自治会リーダー、日野町役場、日野町社会福祉協議会、女性住民らに意見を聴収、賛同者を募り、交流サロン立ち上げに向けて動く。鳥取県が行った「中山間地域づくりサポート体制構築事業（重点支援集落への特別支援）」（期間：平成 24～26 年度）の重点支援集落に指定される
	10 月	9 日	鳥取県日野地区中山間地域振興協議会の重点支援集落に指定される
平成 25 年	1 月	17 日	黒坂地区「おしゃべりカフェ」設立に向けての会合
	2 月	23 日	黒坂地区会議において、初期費用の検討と場所確認
	4 月	21 日	スタッフ会議実施（カフェオープン日程、視察先の検討等）
	5 月	22 日	カフェ看板の取り付け
	6 月	2 日	「おしゃべりカフェ」オープン。記念式典実施（列席者約 30 名）
	7 月	11 日	「笑んがわ市」（島根県雲南市三刀屋町）視察
	9 月	15 日	延べ訪問客 1,000 人目、花束贈呈
	10 月	18 日	カフェ開店時間に合わせ、試行的に移動販売車「あいきょう」が来る
	11 月	6 日	大山町「ふれあいの郷かあら山」を視察（参加者 16 名）
	11 月	中旬	スタッフ懇親会
	11 月	17 日	住民対象の健康講座「歌う健康法」を主催
	12 月	13 日	住民対象の健康講座「骨の健康診断と健康講話」を主催
	12 月	19 日	延べ訪問客 2,000 人目、記念品贈呈
平成 26 年	1 月	23 日	南部町の団体「あいみ富有の里地域振興協議会」がおしゃべりカフェを視察
	2 月	中旬	スタッフ懇親会
	2 月	28 日	平成 25 年度の事業報告と 26 年度の運営について意見交換
	3 月	2 日	住民対象の健康講座「薬膳を知って健康長寿に」を主催（参加者 27 名）
	3 月	20 日	延べ訪問客 3,000 人目、記念品贈呈
	5 月	中旬	のぼり旗やティーセットを新調する
	6 月	2 日	オープン 1 周年記念式典を開催。記念講演「交通安全および振り込め詐欺防止について」
	6 月	14 日	延べ訪問客 4,000 人目、記念品贈呈

表 1 に「おしゃべりカフェ」のオープン前後の取り組み・活動内容を時系列にまとめた。

「おしゃべりカフェ」は、高齢者を中心とした交流サ

ロンで、住民の交流・歓談の場となっている。コーヒーを提供しており、このコーヒーは、住民が訪れてからコーヒー豆を挽き、ネルドリップで一杯ずつ丁寧にいれ

る。カップはあらかじめ温めておくなど、珈琲専門店並みのこだわりをみせている。

加えて、住民向けの健康講座などを主催したり、平成 25 年 10 月 18 日、地域づくりサポーターの仲介により、江府町と日野町を巡回している移動販売車「ひまわり号」⁶⁾に、カフェの開店時間帯に合わせ試行的に来てもらうなどの活動を行ってきた。これまでに開催した健康講座は、「歌う健康法」(平成 25 年 11 月)、「骨の健康診断と健康講話」(平成 25 年 12 月)、「薬膳を知って健康長寿に」(平成 26 年 3 月)などである。

平成 26 年 5 月にはティーセットの新調やのぼり旗の製作などを行い、訪れる人に新鮮な印象を与えている。

同年 6 月 2 日にはオープン 1 周年を迎え、1 周年記念行事が日野町公民館にて開催された。「おしゃべりカフェ」を利用している常連客や黒坂地区の住民などが出席した。この記念行事では、黒坂警察署根雨駐在所から「交通安全および振り込め詐欺防止について」と題した記念講演が行われた。講演後は、カフェでコーヒーが振る舞われた。その様子は日野町役場が発行する「広報ひの」にも掲載された。

3) 運営のモットー

スタッフ一人ひとりができることをできる時だけやり、無理をしないこと、楽しんでやること、きまじめにやらず肩の力を抜くことなどをカフェ代表である西古氏自らモットーとして実践をしている。カフェでは、コーヒーをいれるスタッフ、皿を洗うスタッフ、接客をするスタッフ、テーブルの上に家から持ってきた花を飾るスタッフ、窓際に飾るちょっとした雑貨を作るスタッフなど自然に分担がなされ、それぞれができることをできる範囲で行っている。

また、カフェ内には音楽が流れているが、当番のスタッフが好きな曲をかけられるようにしている。

業務は輪番制である。カウンター横にカレンダーを貼り、スタッフ自身が来られる日を書き込んでいくことで、スケジュール管理がなされている。

4) スタッフの涵養

スタッフらに交流サロンの経験などがあったわけではないため、先進地の視察や懇親会などを実施している。先進地の視察としては、平成 25 年 7 月 11 日に「笑んがわ市」(島根県雲南市三刀屋町中野地区)と平成 25 年 11

月 6 日に「ふれあいの郷かあら山」(鳥取県大山町高麗地区)の 2 カ所を訪問した。

ねぎらいと今後の方針を確認する意味も込めた運営スタッフの懇親会として、平成 25 年 11 月と平成 26 年 2 月に「日野交流センターリバーサイドひの」にて食事を実施した。

また、訪問客に提供するネルドリップ式のコーヒーは、マスターである西古氏の指導により、スタッフのほぼ全員がいれられるようになった。

平成 26 年 1 月には南部町の団体「あいみ富有の里地域振興協議会」が「おしゃべりカフェ」の視察に来訪、意見交換を行った。内外からの視察訪問に対応することで、スタッフには当事者意識や自信が芽生え、誇りの醸成にもつながる。このような傾向は、他の地域のサロンでも見られている⁷⁾。

3. 地域内コミュニケーションについて

「おしゃべりカフェ」のスタッフらは、設立の PR として、「広報ひの」にオープン情報の記事掲載をお願いした。また防災無線放送でも流してもらった。オープン後に開催された健康講座告知の PR の際には、新聞折り込みで黒坂全地区にチラシ配布をした。

4. サロン訪問客の状況

カフェオープン前は、1 日に 10 人も訪問者があれば大成功と考えていたが、オープン以来 1 日平均約 25 人の住民が訪れている。

延べ訪問客 1,000 人目ごとに花束やコーヒーカップなどの記念品を贈呈している。延べ 1,000 人目は平成 25 年 9 月 15 日、2,000 人目は平成 25 年 12 月 19 日、3,000 人目は平成 26 年 3 月 20 日、4,000 人目は平成 26 年 6 月 14 日と、ほぼ 3 カ月ごとのペースで達成されている。

カフェ内の掲示板には、延べ訪問客 1,000 人目ごとの写真や取り上げられた記事などを貼付している。

また前述した通り、同町公民館では週 2 回の臨時診療や月 1 度の老人学級などが行われるため、診療担当の医師やスタッフも「おしゃべりカフェ」を利用している。

5. 訪問客である住民の感想

開店と同時に地域住民が訪れ、特に午前中はにぎやか

な声がロビー内に響き渡っている。「いいことを始めてくれた」、「ここに来て、みんなと顔を合わせてしゃべると元気が出る」、「楽しみができた」、「この場所に来ることを目的に外に出る」といった意見が多く寄せられている。リピーターが多いのも特徴である。

また「仕事に出かける前にここに寄る」、「農作業の最中に立ち寄った」、「朝の一仕事を終えて来た」、「午後もまた来る」という訪問客も少なくなく、憩いの場、地域住民の場としての定着が伺える。中には、「家内に、私は米子に出るけえ今朝のコーヒーは『おしゃべりカフェ』で飲んできてと言われて」訪れる住民もいるなど、利用の仕方はさまざまである。

訪問客の中には、カフェにマイカップを置いている住民らもあり、こうしたことは「おしゃべりカフェ」が自分の居場所となっていることの証でもある。

V 事業展開の成果と課題

これまでの活動状況を踏まえ、現段階における成果と課題を提示する。

1. 成立過程の3段階分類

現在までの事業展開は、ニーズの把握期、具体化への検討期、実践・運営期の3段階に分けることができる。

1) ニーズの把握期

高齢者が関心を持つことを高齢者の身近な視点で考えながら、今何が必要なのかをすくい上げることに取り組んだ。

黒坂地区では、地区内で空いている店舗や施設を使わせてもらい、みんなが気楽に集まれるような場所を作ることができたという話は以前からあった。しかし、話題にはのぼるが、住民の意向としてきちんと聴取したりまとめたりする者がいなかったというのが当時の状況であった。そこで、地域のニーズをあらためて整理しそれを実行するため、地域づくりサポーターが「交流拠点開設」の計画を立て、女性だけの会合を開いたり、黒坂地区の各種活動団体のリーダー（主に男性）らの意見を聴取した。

2) 具体化への検討期

事業の具体的な方向性を明らかにするため、日野振興センター職員と地域づくりサポーター、日野町役場がそれぞれ連携しながら、地区の高齢者と対話や会合を重ね

た。話し合いに参加した高齢者は、地域ですでにネットワークを持っている地域のリーダー的な高齢者、特に女性を中心メンバーであった。高齢者が持っているネットワークをスタッフ体制の構築や集客に活用することとした。

同時に、「交流拠点」の場所をどこに設置するかということで、黒坂地区内の空いている施設や民家が候補として上がった。最終的に、水回りの使い勝手や採光の良さ、日野町が家賃や光熱費を負担するといったことから、公民館を利用することになった。

「おしゃべりカフェ」で提供されるコーヒーは、本格的なネルドリップ式のコーヒーに決めた。当初は、インスタントコーヒーを出すという案もあったが、家で飲めるものをわざわざ外で飲む人はいないだろうということから、手間はかかるがこだわりのあるコーヒーを提供することで特徴を打ち出すことにした。

3) 実践・運営期

スタッフらは無償のボランティアである。代表者である西古氏は、楽しく、できることをできる範囲で無理せず、肩の力を抜くことをモットーに運営している。スタッフもその意見に賛同し、各人ができることを無理のない範囲で実践している。

運営が軌道に乗るに連れ、スタッフには自分たちの出番が、訪問客には自分たちの居場所が確保されてきた。そして、地域への認知が広がることで、運営スタッフらには感謝されることの充実感、幸福感、自分の存在を認めてもらえるという心理的効果が生まれ、生き甲斐へとつながっている。自分が高齢となっても必要とされることがモチベーションやエネルギーにつながり、活動意欲がさらに高まった。一方、訪問客には「おしゃべりカフェ」を大切にしたいという気持ちも生まれてきている。

2. 行政の役割

黒坂地区での「おしゃべりカフェ」の展開における、日野振興センター、地域づくりサポーター、日野町役場の役割を考察する。

ヒアリングによれば、まずオープン前の段階では、これら行政サイドは従来のトップダウン型ではなく、いかに住民が内発的に動いてもらえるかということを念頭におきながら作業を進めたという。そしてそれぞれがうま

く連携しながら準備を進めていった。行政のそれぞれの担当者らは、「相性を判断しながら相互補完的に立場の異なる人を組み合わせるインターメディエーター（仲介者）、上手な聞き役であるファシリテーター（促進者）、議論を整理するトランスレイター（翻訳者）」⁸⁾などの役割を状況に応じて担っていたと考えられる。

オープン後の運営は最初から「おしゃべりカフェ」の代表者とスタッフに任せた。これがスタッフらの自主性を高めることにつながった。後方支援を意識し、行政が関わらないといけない仕事、例えばカウンター内の水道の調子が悪いなど施設面での不具合が生じた場合などには、町役場はすぐに修理に向かう。この素早い行動も「おしゃべりカフェ」のスタッフらによれば、スタッフのモチベーションを維持することにつながっているという。

3. 今後の課題

目標は、事業範囲を拡大することではなく、現在の状態を長く持続していけるかということである。補助金などがなくても運営していける体制をどう構築するか、年齢構成の高い現在のスタッフ体制を次世代にいかに関引き継ぐか、という2点が具体的な課題である。

VI 考察

地域づくりにおいては、住民の内発性、自発性を引き出す、その地域の特性に合致した方策をいかに見つけ出すかが重要である。

今回の「おしゃべりカフェ」のような事例の分析・検証を積み重ねることが、地域に住む人の思いを大切にしたい、人口が減少しても幸せに暮らせるための仕組み作りとはどのようなものかを検討する一助になると考える。

VII 謝辞

本報告におけるヒアリング調査、また報告作成に当たり、「おしゃべりカフェ」代表の西古尚史氏、スタッフの皆様、訪問客である住民の皆様、日野町公民館館長山本照夫氏、日野町役場企画政策課課長高橋浩毅氏、副主任幹三好達也氏、鳥取県西部総合事務所日野振興センター日野振興局地域振興課中山間地域振興リーダー三木浩司氏、地域づくりサポーターの梅林敏彦氏はじめ、たくさんの方からご支援、ご協力を頂いた。ここに深くお礼申し上げ

たい。なお本報告は、太陽生命厚生財団からの助成を受けている。

引用文献及び注釈

- 1) 鳥取県（2006）平成 16・17 年鳥取県統計年鑑平成 18 年刊. 鳥取県:18
- 2) 日野町役場調べ。
- 3) 地域づくりサポーターは、鳥取県内の市町村等と連携して、集落や広域的地域運営組織に対してきめ細やかな支援を行うことを使命に、平成 24 年度より各総合事務所に配置されている。地域づくりサポーターの役割は、集落等における地域づくりにおいて、集落点検（課題の掘り起し）、集落活動（話し合いの促進）、行政情報の提供、相談対応などを行っている。
- 4) 「中山間地域サポート体制構築事業（重点支援集落への特別支援）」とは、集落や地域運営組織等への支援体制を構築することで、地域が直面する課題の解決につながるよう、地域づくりのサポート体制を構築するものである。この取り組みは、地域づくりサポーター等外部人材活用モデルでもあり、地域づくりサポーターによる集落への現地支援を本格化させるものでもあった。
- 5) 「鳥取県中山間地域振興協議会」とは、2008 年 10 月に制定された「鳥取県みんなで取り組む中山間地域振興条例」を受け、県内の東・中・西部、日野地区の計 4 地域に設置されたものである。地域によって異なる中山間地域の課題把握とその解決に向けた施策検討に着手した。
- 6) 日野町根雨に本店を有するスーパーマーケット有限会社安達商事（屋号・あいきょう）が所有する移動販売車。大型の 3 トントラックを改造した「ひまわり号」と 2 トントラック「こひまわり号」2 台、軽トラック「こまわり号」2 台からなる。中山間地域内の集落の状況に合わせて移動できる。1990 年に生協が閉店後、安達商事と生協の元従業員が移動販売を立ち上げた。
- 7) 空閑睦子・安田亮・有田昭一郎・神田直子（2013）地域づくりとしての活動の条件についての事例研究（Ⅲ）. 島根中山間セ研報 9：11-30.
- 8) 井関利明・山田眞次郎（2014）思考～日本企業再生のためのビジネス認識論. 学研:337-338